

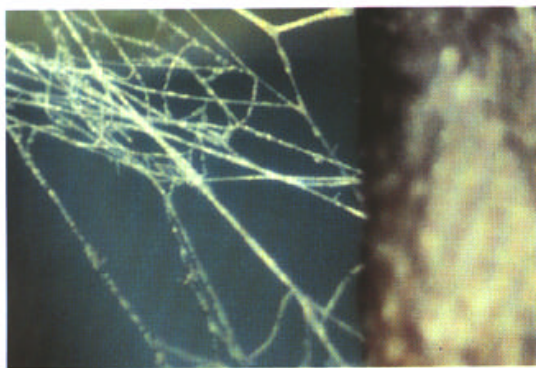
＜リンゴくもの巣病＞



連続降雨下での激しい葉腐れ症状。



水浸状の病斑と菌糸で綴り合わされた病葉。



罹病葉間のくもの巣状菌糸。



罹病部に形成された菌核。

＜リンゴくもの巣病＞

病原菌：Rhizoctonia solani Kuhn

菌糸融合群AG-1、培養型IB

1. 症状

はじめ葉に暗緑色、水浸状の不整斑を生じ、連続降雨下で急速に蔓延して激しい葉腐れを起こす。罹病部には白色～短褐色の菌糸がくもの巣状に生じ、病葉を着生したまま綴り合わせ、枝に巻き付ける。また淡褐色～褐色の菌糸塊と菌核が形成される。乾燥して病勢が止まった後も、罹病葉は脱落せずに枝に貼りついたまま残ることが多い。

本病は下枝に多く発生するが、上方の枝葉にも認められる。

2. 生態

本病の詳細な発生生態については不明であるが、連続降雨下で菌糸が枝や葉に蔓延し、伝染するものと考えられる。また菌糸塊、菌核は不良環境下での耐久性が高い。

本病菌は多犯性で多くの植物にくもの巣病、葉腐病などを起こす。

3. 防除

1) 適切に剪定を行い、過繁茂を避ける。 2) 発病葉を除去する。

4. 記事

本病は1995年6月～9月、南多摩および西多摩のリンゴ園で発生した。